

作文教育における TAE の活用

—得丸さと子(2008)『TAE による文章表現ワークブック』—

鈴木(清水) 寿子

【キーワード】TAE(Thinking At the Edge)、フェルトセンス、作文教育、文章表現、理論

1. 書誌情報

得丸さと子(2008)『TAE による文章表現ワークブック』図書文化 全 174 ページ、2200 円 ISBN: 978-4-8100-8524-2 .

2. 本書の概要

2.1 本書の目的

本書は、アメリカの哲学者であり心理臨床家でもあるユージン・ジェンドリン¹がメアリー・ヘンドリクスと共に開発した理論構築法・TAE²(Thinking At the Edge)を、文章表現法に応用した得丸さと子氏によるテキストである。TAE は「Thinking at the edge steps」として、ジャーナル『The Folio』(2004)に原著が掲載された。14 ステップで示された思考のプロセスが「TAE」の全体像である。理論構築法である TAE を文章表現法として活用することは得丸氏独自の工夫であり、小学生から成人まで幅広い層の作文・文章表現への利用が目指されている。本書では特に大学生の文章表現系の授業³に合わせ、各ページに中井梓左氏によるイメージ図やイラスト⁴が配され、TAE のステップの理解が促進されるようになっている。

本書の目的は文章表現による内面的成長であり、以下の5つのような文章の作成が目指される。

- 1.書いている過程で、自分の「からだの感じ」に気づく文章
 - 2.自分の「からだの感じ」を適切な言葉にできた実感がもてる文章
 - 3.自分の「からだの感じ」の全体をまとめることができた実感がもてる文章
 - 4.ほかの人に見せることができる(見せたい)文章
 - 5.読んだ人の応答(共感や意見)が得られる文章
- 「からだの感じ」とは、ジェンドリン(1981)が創出

した言葉であるフェルトセンス(a felt sense-感じられた意味-)を指す。フェルトセンスはからだの置かれた状況全体に対する、からだの内側での気づきの感覚であり、ステップを踏むことにより、焦点化され、形作られていく。フェルトセンスに焦点化する14のステップが、TAE なのである。TAE を用いることにより、言語シンボルや論理の力を活用して、フェルトセンスをより精緻に構造化し、からだに暗在する知を豊かさ・複雑さを損なわずに言葉にすることができる。本書では TAE を平易に紹介しており、日本における初めての TAE 解説書としても位置づけられる。

2.2 本書の内容

本書はウォーミングアップ編、初級編、中級編、上級編、応用編に分かれている。個人あるいはグループで行える24のワークが用意されている。同じテーマで継続して取り組む場合、本書のワークの10(11)、18、21、22、23、24の順に行うことにより、理論構築法としてのTAEに最も近い手順を体験することができる。

本書ではTAEの14ステップのうち、12ステップまでを対象としている。各編とTAEのステップとの対応は表1のとおりである。

表1 テキスト編とワークおよびTAEとの対応

	目標	ワーク	TAE
ウォーミングアップ編	フェルトセンスをつかむ	1,2,3,4,5,6	ステップ1
初級編	フェルトセンスの微妙で複雑なところを言葉にする	7,8,9,10,11	ステップ1~5
中級編	フェルトセンスの豊かさを失わずに一般化する	12,13,14,15,16,17,18,19	ステップ6~9
上級編	フェルトセンスを構造化して理論を作る	20,21,22,23,24	ステップ10~12
応用編	全体を通して復習する、テーマに合わせて応用する	-	ステップ1~12

2.3 ワーク

ワークは「感じ・考えるワーク」と「書き・交わすワーク」の2部構成になっている。「感じ・考えるワーク」はTAEを平易にした内容になっており、フェルトセンスと論理を応答させながら進める。「書き・交わすワーク」では、からだの感じから離れないようにフェルトセンスを絵や文章に展開し、創作物にまとめる。「書き・交わすワーク」にはワーク実施者による作成例が掲載されており、実際の作業の展開を参照することができる。また、作業用のワークシートは本書中に示されたURLにアクセスしパスワードを入力するとダウンロードできるようになっている。

3. 各章の紹介

本書の4編(ウォーミングアップ編、初級編、中級編、上級編、応用編)を順に紹介する。

3.1 ウォーミングアップ編-フェルトセンスをつかむ

ウォーミングアップ編では、ワークを通じ、まだ言葉にならない「言いたいこと」を、「からだの感じ」として捉えられるようになることを目指す。からだの内側へ注意を向けることにより、フェルトセンスはゆるやかに形作られる。

ここでのワークは、お気に入りの場所にいる感覚やある経験に伴う感情をつかみ、フェルトセンスを形成させ、オノマトペや比喻にしてそこから受ける感じの中核を言語化するといったものである。書くべき内容に向き合う手助けとなる過程である。

3.2 初級編-微妙で複雑な感じを言葉にする

次の初級編では、「書きたいこと」を既存の表現ではなく、独自のものとして個人の経験から書き出せるようになるために、フェルトセンスをつかみ言葉にしていくことを目指す。

初級編のワークは、自分の得意なことを選び表現する、詩を作るなど、基礎的かつ実用的な文章表現のワークとなっている。

3.3 中級編-豊かさを失わずに一般化する

中級編では、TAEの主要な手順である「パターン」「交差」を扱う。「パターン」とは「多くの事例の中に繰り返し表れる可能性があるもの」であり、得丸氏は、ヒトデ、クッキー、星のすななどに見出せる「星型」で説明している。ワークでは、イソップ童話「うさぎとかめ」から「油断大敵」というパターンが取り出せることを例に、浦島太郎、かぐや姫、一寸法師

師の各ストーリーから、パターンを取り出す練習を行う。その後、個人の経験からパターンを抜き出し、社会に対して提言を書くワークへつなげていく。

「交差」とは、「ある事例が示唆することが、別の事例にもあるとすること」である。2つ以上のパターン、事例を重ね合わせることで浮かび上がる。

「うさぎとかめ」と「浦島太郎」を交差した例では、得丸氏は「うさぎとかめ」のめがねをかけて「浦島太郎」を見ると何が見えるか、というたとえで説明している(図1参照)。この例では、亀がうさぎとの競走に勝ったことと、太郎を竜宮城に連れて行ったことから「一見、愚鈍な亀が実はすばらしい力を持っている」、さらに一般化すると「能力がなさそうに見える人が、実は非凡な才能を持っている」などのことが交差の結果として見えてくる。

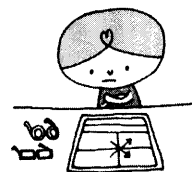


図1 「交差」を説明したイラスト

3.4 上級編-概念を構造化して理論を作る

上級編では論理とフェルトセンスを応答させながら、暗在する意味を概念の関連として引き出し、「理論」を作る。本書では「理論」とは、「概念の構造体、つまり、いくつかの概念が互いに組み込まれひとまとまりの構造をなしているもの」とされる。

3.5 応用編-研究レポートを書こう

応用編ではTAEの質的研究への応用を目指す。これまでの各編で学んできたことをつなぎ、研究テーマに適用する。この作業を通じて、研究レポートを執筆することもできる。実際にTAEを用いて卒業論文を書いた2つの例が紹介されている。

4. TAEの応用としての文章表現ワーク

本書に収録された24のワークに理論構築法としてのTAEのエッセンスが込められている。この章では、ジェンドリンのTAEのステップが本書でどのように文章表現のワークとして成立しているかを見ていく。得丸氏によるTAE本文の和訳は本書のp161~171に収録されている。ここではステップのタイトルのみ表2に抜粋した。各ステップの詳細なインストラクションは本書を参照されたい。

4.1 TAE ステップ 1~5 - フェルトセンスから語る

4.1.1 ワーク 10: マイセンテンスを詩にしよう

初級編のワーク10「マイセンテンスを詩にしよう」のねらいは、フェルトセンスの独自性を詩にす

表2 TAEのステップ

<p>ステップ1～5:フェルトセンスから語る</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.フェルトセンスに形を得させる 2.あなたのフェルトセンスのなかの論理以上のものを見つけましょう 3.キーワードを通常の定義で使っているのではないことに気づきましょう 4.あなたが3つのキーワードそれぞれに興味させたいことを言う文、または新鮮な句を書きましょう 5.新鮮で言語学的には通常ではないような文を書くことによって、あなたが各キーワードに興味させたかったことを拡張しましょう
<p>ステップ6～8:側面(実例)からパターンを見つけましょう</p> <ol style="list-style-type: none"> 6.側面を集めましょう 7.集めた側面に、詳細な構造を見せてもらいましょう 8.側面を交差させましょう 9.自由に書きましょう
<p>ステップ10～14:理論形成</p> <ol style="list-style-type: none"> 10.タームを選択し、相互に関係づけましょう 11.ターム間の本来的関係を探索しましょう 12.恒久的なタームを選んで相互に組み込みましょう 13.あなたの理論をフィールドの外に適用してみましょう 14.あなたの理論を自分のフィールドのなかで拡張し適用しましょう

ることである。TAEのステップでは1～5に当たる。このワークでは、心を深く捉えた経験から詩を作る。まず、リラックスして自分の内側に注意を向け、心に残っている、詩にしたいテーマを思い起こす。その感じから浮かんでくる言葉を書きとめ、特に大事な言葉に下線を引く(ステップ1に該当)。自分が最もびったりくると感じられる形を目指し、短い一つの文(マイセンテンス)に表す(ステップ2)。マイセンテンスのなかで最も大事な言葉に下線を引き、キーワード1とし、その辞書の語義を確認する。その後、キーワード1を空所にし、からだの内側に注意を向けながら、辞書の語義では説明しきれないフェルトセンス独自の意味を引き出す。キーワード1とは別の言葉で空所に入りそうな語、キーワード2、3を書く(ステップ3)。次に、3つのキーワードそれぞれのフェルトセンス独自の意味を言語化していく(ステップ4)。再び、キーワードの箇所を空所にし、前段階で選んだ語句を並べていき、最後に「…」をつけておく。この文を見ながらフェルトセンスの全体を感じ直す(ステップ5)。その後、これまでの手順を見渡し、語の順序を入れ替えたり、新しい文を付け足したりしながら、フェルトセンスと照合させ、詩にする。タイトルをつけ、完成させる。本書中の例では、初めてバイクに乗ったときのフェルトセンスを、「光、風、風圧、音、モーター、色、熱、重み、軽さ、慣性、加速、レスポンス…」などの言葉から「吹き上がる音」を、風圧がじゃまをする」というマイセンテンスにした。キーワード「音」には「エンジンの音、風の音、ギアの音、震動、声…」など、辞書にはない独自の意味が発見された。「音」の位置に入る別のキーワードとして「鼓動」「進む心」を得て、「風圧の抵抗をよそに音が吹き上がる光が前から近づいてくる」から始まる詩に展開させている。

このワークの実施により、辞書の語義に収まりきれない自分のフェルトセンスを表現することができ。また、成果物として詩ができるため、イラストや解説をつけたり詩集を作ったりして、クラスでの相互鑑賞活動を行うことも可能である。

4.2 TAE ステップ6～8 - 側面(実例)からパターンを集めましょう

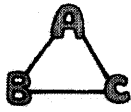
4.2.1 ワーク18:経験から論じよう

中級編のワーク18「経験から論じよう」は、「パターン」「交差」を使って、日々の経験を見つめ直してみるのがねらいである。TAEのステップの6～8に該当する。このワークでは、仕事や趣味など、長く続けていることを小論文にする。そのことについての「知っている感じ」のフェルトセンスを感じながら、重要な経験4つを選ぶ(簡略化して2つで行っているワークもある)。これらの4つの経験がTAEの用語での「側面(実例とも呼ばれる)」1～4となる(ステップ6)。実例1～4からそれぞれ、他の経験にも適用できる一般的なパターンを見出し、パターン1～4とする(ステップ7)。一つの実例から見つけたパターンを他の実例と交差させる。パターン1を実例2に、パターン2を経験3に、と順次行う(ステップ8)。交差しての気づきを箇条書きにする。本書中には「私と自転車」と題された道具論で、「突然のパンク。なぜ?いまごろ?ガックリする。やり場のない怒り」という実例から「いつも利用するからこそ不調時にありがたみがわかる」というパターンを見出し、「壊さない程度にとことん使ってやることだ。そうすれば使っていくうちにだんだん自分の体と同化してきて、自然と愛着がわいてくる」という結論にまとめた例が紹介されている。このワークは、個人的な経験を深く掘り下げる思考の練習になる。直接経験を集めて考えを深めることが可能である。また、資料を用いることで、広い範囲からスケールの大きな思考もできる。経験の新たな面が気づかれ、多面的な思考ができるため、就職活動のための自己PR文、レポートの論説文などに応用が可能である。

4.3 TAE ステップ10～12 - 理論形成

4.3.1 ワーク21:「～は…である」を使って考えよう

これ以降のワークは上級編になる。上級編ではTAEのステップ10以降にあたる理論形成を扱う。ワーク21「『～は…である』を使って考えよう」のねらいは、用語を大まかに関連づけることである。「～は…である」という文型を使って加筆していく。



骨組みが見えてくる

図2 用語A~Cの関係

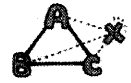
ワーク 21 では、まずテーマを決め、そのテーマから感じられるフェルトセンスの中心を含む大きな三角形をイメージし、図2のように三角形の3つの頂点を感じてみる。その3つの頂点を用語 A、B、C とする。本書中の例では「ブログ上の人間関係」というテーマに、「A:本屋のおじいさん、B:シャボン玉、C:王様の耳はロバの耳」の用語が選定された。同じフェルトセンスから現われた3つの語にはなんらかの関係があると考え、3つの言葉を「A=B」と置いてみる。意味の通らない奇妙な文になるが、この文をフェルトセンスに適合し、かつ文法的に正しくなるように、「A は B である」の前後や間に「一部の」「少なくとも」「一種の」などの語句を入れて加筆する。同様に A=C、B=C も作成する(ステップ 10)。この例では「A(本屋のおじいさん)=B(シャボン玉)」をフェルトセンスに合わせた形に変え、「本屋のおじいさんとの会話はシャボン玉のようである」という文が得られた。そういえる理由として、「毎日カウンターに座るおじいさんはのんびり客を待っていて、たまに人が来ると本に囲まれながら話をする。気の合う客なら話が弾み、シャボン玉はきれいにくっつく」という説明が付された。このあと「A=C」「B=C」も同様に行い、肉付けして要旨を作成、下書きを経て完成させる。この作品はブログの管理者と読者の関係についての小論文になっている。

このワークでは比較的短時間で、短めの論理的な文章作成が可能になる。字数制限のある小論文や、プレゼンテーションのスライド作成にも適している。

4.3.2 ワーク 22:性質を考えて思考を深めよう

ワーク 22「性質を考えて思考を深めよう」のねらいは、用語をより深く関連づけることである。3用語の選定まではワーク 21 と同様である。次に「A はもともと B である」と、「もともと」を入れた文を作り、用語間の本来の性質を考える。この作業の結果、図3のように新用語 X が現われることがある。この場合、X と用語 A~C との関係を見出すことで、三角形と新しい点を結び、理論を立体的に展開することができる(ステップ 11)。本書中の例では「眠れない夜のこと。いまこの時間に起きていることに意味を見出さずにはいられない」というテーマに「A:不

安定な自己、B:思考の螺旋、C:枠の中の無限」の用語が選ばれた。この例の作者は「A(不安定な自己)はもともと B(思考の螺旋)である」と言えるとするならば、「繰り返すことは確かな法則を持っている



骨組みが足すれていく

図3 新用語Xと用語A~Cの関係

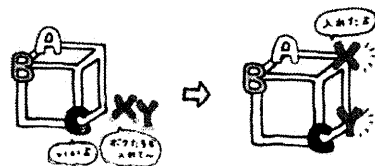
からこそ、同じ軌道で回り続けることができる。その法則があやふやでは、闇雲に動き続けるだけだ」と説明した。このとき、新用語「雲の形」が浮上した。最終的には新用語も組み込んで文章にする。「眠れない夜、不安定な自己は自身の姿を求めて雲のように形を変える。それは自己との対話、つまり、枠の中の無限である。無限の自問自答のキャッチボールでは、自分の思考の道筋は螺旋をたどる(後略)」という要旨が作られた。

このワークはクリエイティブシンキングの手法の一つに位置づけられ、新企画立案などに役立つ。

4.3.3 ワーク 23:概念を組み込んで理論を作ろう

ワーク 23「概念を組み込んで理論を作ろう」では、用語を構造化して理論を作る。理論作りの中心となる重要なワークである。

ワーク 21 と同じ手順で用語 A、B、C を選定したあと、用語 A を、B と C を用いて説明する。同様に、用語 B を A と C を用いて説明し、用語 C を A と B を用いて説明をする。この作業の間に新しく重要語 X、Y が出てきたら、それも加え新概念とする(ステップ 12 前半)。図4のように、新概念 X、Y も、A~C の用語を使って説明することにより、諸概念は相互に定義され、互いに連結し構造体となる。本書では「読書をして楽しんでいるときのフェルトセンス」として、「A:対話、B:選択、C:自画像」の用語を用いて説明した例がある。新たに出てきた重要語「発見」が新概念となった。新概念「発見」を A、B、C を用いて説明し、「発見」は自分の思想、趣味を、1冊の本の中から集中して選択することであり、自分の知らなかった部分を見つけることである。そ



骨組みがしっかりしてき

図4 理論への新概念の追加

の部分と「対話」することで、次第に「自画像」が見えてくる」と、概念が相互に組み込まれた文によって定義された。

こうして出来上がった文章は、テーマとしたフェルトセンスの理論の骨格である。この理論から離れずに、序論・本論・結論と展開すれば、文系の論文のような長編の論理的文章作成の準備となる。

4.3.4 ワーク 24:理論を精緻化しよう

ワーク 24「理論を精緻化しよう」は、理論のさら

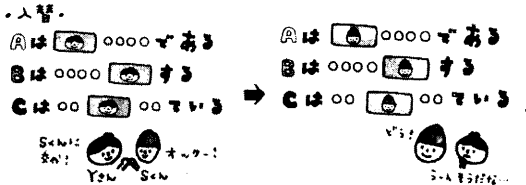


図 5 用語の入れ替え

なる精緻化のため、ワーク 23 までを行った後に行う。図 5 のように、ある概念の類似語を使って入れ替えてみる(ステップ 12 後半)。入れ替えて違いを感じ、それを言語化することで、理論の細部が明確になってくる。入れ替えのほかに、類似語の統合、

概念の細分化などを行うことにより、図 6 のように諸概念が相互に説明され、理論の立体的骨組みが強くなる。本書の例では、「主体的に考えるとはどういうことか」というテーマで「違う角度からとらえる」「発想の逆転」「疑問を持つ」などの用語から「違う角度からとらえる」ということは、自分の考え方に疑問を持ってその考えから離れて俯瞰して見ることである(後略)から始まる定義を作った。ここでは「自分」と「軸」を入れ替えている。入れ替えたことにより、「軸」は比較できるものであり、基準のようなもので、軸≠「自分の考え方」ではない「自分の考え方は変わる要素がある」「軸」は自分とも言えるものだから、動かないなどと気づかれ、「自分」と「軸」の違いがはっきりした。「主体的に考える」ということは、自分の考えに軽く「なぜ」と疑問をもち、離れることから始まる(中略)自分の今までの価値観や、何が重要であるのかを立ち止まって考えるようになり、自分(軸)がより強固になると、より精緻に理論が発

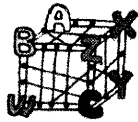


図 6 理論の精緻化

展した。

展した。

精緻化された理論は経験が組み込まれた文章になる。一般論ではなく、フェルトセンスという「からだの感じ」から出発した理論であるから、他者からの質問や批判を受けたときに、自己の「からだの感じ」を手がかりに、さらなる表現を産出していくことができる。そのため、他者とのコミュニケーションが可能となり、批判に耐えるだけでなく発展を続ける理論となる。

5. 終わりに

本稿では、文章表現のためのワークと理論構築法・TAE がいかに結びつき、展開されているかを中心に各章を概観した。本書はジェンドリンの哲学に基づき、「からだの感じ」を使って文章を書く点で新しい文章表現法を展開している。文章表現の指導者、学習者の他、TAE やフォーカシング等、ジェンドリンの哲学の理解を目指す人への平易なガイドにもなっているとイえる。TAE による作文教育の今後の発展に期待したい。

注

1. ジェンドリン(Eugene T. Gendlin)は身体の内側の感覚であるフェルトセンスに注意を向け、象徴化を促進する技法・フォーカシング(focusing-焦点合わせ)を考案した人物である。心理臨床家としてはロジャーズに師事した。また、その哲学は現象学の流れを汲んでいる。
2. TAE に一般的な日本語訳はなく、通常「TAE(ティーエーイー)」と呼称される。本稿でも「TAE」と記す。なお、日本フォーカシング協会のウェブ上に公開されている村里忠之氏による TAE の日本語訳では、氏は TAE を「辺縁で考える」と訳している。
(http://www.focusing.org/jp/tae_steps_jp.html)
3. 得丸氏は日本人大学生だけでなく、留学生対象のクラスでも本書のワークを用いた実践を行っている。
4. 図 1~6 は本書中から抜粋した。(発行元・著者の許諾を得て転載)

参考文献

- Gendlin, E. T. (1981) *Forcusing*, Toronto: Bantam books. (村山正治(訳) 1982『フォーカシング』福村出版)
- Gendlin, E. T. & Hendricks, M. (2004) *Thinking At the Edge steps*, *The Folio*, 19 (1), 12-24.

すずき(しみず) としこ/お茶の水女子大学大学院
toshikoshimizu@akane.waseda.jp